

「高齢期における自立と社会参加に関する調査研究」

I 調査の概要

1 調査の概要

(1) 調査の目的

介護保険の導入は、わが国の高齢者福祉のあり方を大きく変容させるとともに、地方分権推進の一助としての機能も果たしつつあるといえる。現在、介護の社会化の推進とともに、高齢期の健康増進、介護予防、生きがいづくり、社会参加といったより積極的な施策展開が求められている。これらは、地域社会の活性化や地域に暮らす住民のライフスタイルの成熟化といった視点から、検討されるべき課題でもある。

本研究では、地域での助け合いや住民相互のサポートが活発であると考えられる小規模地方都市に住む高齢者に焦点を当てる。そして、高齢期の社会参加、健康、生活満足度の相互の関連を明らかにし、高齢期の健康維持・生きがいづくり等を支援する施策立案に寄与することを目的とする。また、介護予防施策の検討のため、50歳時の健康習慣、社会参加、人間関係についても測定している。

(2) 調査の方法

調査は2001年5月15日(火)～6月10日(日)の期間に、岐阜県中津川市に居住する60～79歳の男女1,000名を対象として、訪問面接法により実施された。調査対象人の選定は、住民基本台帳から無作為二段抽出により行った。

(3) 回収数(率)

有効回答者数 791名 (有効回答率 79.1%)

【担当スタッフ】

財団法人 ダイヤ高齢社会研究財団	研究員	矢部 拓也
”	主任研究員	西村 昌記
”	主席研究員	稲川 雅信
”	研究部長	蜂谷 幸夫

2 結果の概要

健康習慣の継続性

健康習慣の指標のうち、「軽い運動やスポーツ、散歩をするなど体を動かす」「塩分をひかえるようにしている」「タバコをひかえるようにしている」「お酒はほどほどにしている」の4項目について、50歳の頃と現在の2時点についてたずねた。これらの健康習慣を50歳の頃に実施していた人の大多数（87～99%）は、現在も実施していることがわかった。

健康習慣、健康度および生活満足度の関係

50歳の頃に健康習慣を実施していた人は、実施していなかった人に比べて現在の健康度自己評価が高かった。特に、「軽い運動やスポーツ、散歩をするなど体を動かす」ことをしていた人は、統計的に有意に健康度の高い傾向が認められた。また、健康度自己評価の高い人は生活満足度が高かった。

健康度と人間関係、社会参加との関係

健康度自己評価の高い人ほど、人間関係（「近所づきあい」「友人づきあい」「親戚づきあい」「仕事仲間とのつき合い」）が良好であり、社会参加（「氏神様のお祭り」「家の前の清掃、草取り、雪かきなどの作業」「地域の清掃などの近所の家が共同して行う作業」「ボランティアや社会奉仕活動」への参加）をしている人が多かった。また、社会参加には50歳の頃からの継続性も認められた。

人間関係、社会参加と生活満足度

人間関係が良好な人、社会参加に熱心な人は、そうではない人に比べ、生活満足度が高かった。

まとめ

対象地域である中津川市の住民（60～79歳）は、都市部の住民と比べ、地域に密着した社会参加（「氏神様のお祭り」「家の前の清掃、草取り、雪かきなどの作業」「地域の清掃などの近所の家が共同して行う作業」）に熱心な人が多く、近隣関係や親戚づきあいなどが豊かであった。高齢期の生活の質（QOL）の規定要因として健康度が重要であることはよく知られているが、良好なコミュニティ環境において、より効果的に生活満足度に寄与しうることが推察された。

